復興庁
Reconstruction Agency

ジモトではたらく

宮城県版

令和３年１月発行

地元就職のススメ

地元か地元以外か。
働く場所は、就職を決めるときに
頭を悩ませることの一つです。
実は地元には、地元ならではの特徴を生かし、
事業を展開している企業がたくさんあるのです。
また、その地域で働いているからこそ得られる
喜びや魅力があるものです。
働くということにおいて、
「ジモトではたらく」という選択をした人たちに
スポットライトを当てて、
地元企業の仕事や地元で暮らす魅力を紹介します。
今こそ「ジモトではたらく」ことに注目してください。

Contents

地元就職のススメ …… 2
巻頭インタビュー …… 4
地元にもチャンスがある
自分らしく成長できる働き方を見つけよう
横田　浩一さん
慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 特任教授
故郷で見つかった
「自分らしく」働ける会社 …… 8
熊谷　未悠さん
株式会社気仙沼商会 総務・採用担当 2018 年入社
大好きな港町・気仙沼で
復興への「航海」を見届ける …… 12
後藤　陽菜さん
株式会社オノデラコーポレーション アンカーコーヒー・マザーボート店副店長 2016 年入社
アメリカの食文化を発信
人が行き交うお店を目指す …… 16
佐藤　賢将さん
ハリーズジャンクション オーナーシェフ 2018 年起業
都会と地方の違い …… 20
地元で働くことを考えよう …… 23

巻頭インタビュー

地元にもチャンスがある

自分らしく成長できる働き方を見つけよう

慶應義塾大学大学院　政策・メディア研究科
特任教授　横田　浩一さん

コロナ禍で注目「地方で働くこと」

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、世の中の仕組みが大きく変化しています。それは、就職や働き方を取り巻く環境についても、例外ではありません。特にリモートワークやテレワーク、副業など、働き方の分野において、大企業でも改革が加速したと感じています。

リモートワークは、２０２０年4月の緊急事態宣言を受け、都市部を中心に急速に拡大。東京では宣言の解除後も、出社率を半分以下まで減らしている企業があります。さらに、「アフターコロナ時代」を見据え、一部の大企業ではリモートワークの常態化や、本社を東京から地方に移転する試みなどが始まっています。

私が仕事で全国各地を訪れ、若者の声を聞くと、地元で働きたいと思っている若者がたくさんいます。しかし「やりたい仕事が無い」「給料が安い」という理由で、東京や都市部に関心が移ってしまう。こうした構図がこれまでありました。

コロナ禍を機に、東京にいないと働けないという状況は崩れつつあり、「地方で働くこと」に関心が集まっているように感じています。おそらく今の若者も、同じ感覚を抱いているのではないでしょうか。

未来への不安と働きがいの低さが課題

コロナ禍の影響により就職活動が大きく制限される中、学生たちは想像以上の苦労を経験しているはずです。

さらに、これからの「人生１００年時代」に向け、年金の受給額も少なくなることが予想されます。また、同じ会社に長く務める時代から、転職が当たり前の時代に向かっています。

こうした混沌とした状況下で、自分のキャリアについて悩み、不安を感じている若者が多いことでしょう。私も学生から、「どういう仕事に就いたらいいか」「どんな企業を選べばいいのか」という相談をよく受けています。

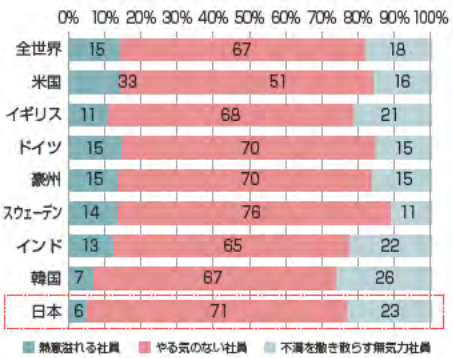
将来について不安を感じる若者が多いことは、就職を取り巻く課題の一つと言えます。

また、日本のビジネスパーソンの仕事に対するモチベーションの低さも問題となっています。東京の企業で働く人のモチベーション、つまり「働きがい」は、先進国の中で最低といわれていて、ある海外の調査で、日本には「熱意あふれる社員」の割合が６％しかないという報告もあります。（図1）

その理由として、利益優先の企業体質や良い先輩ロールモデルがいない、チャレンジできる機会が少ない、組織の閉塞感などが指摘されています。

実は、国が進める働き方改革は、ワークライフバランスや残業時間の削減など、働きやすさを向上させるもので、働きがいを向上させるものでは無いと考えています。これからは、働きがいがある仕事や会社を選んでいくことはとても大切になることでしょう。

図1　世界各国の仕事への熱意度調査



「State of the Global Workplace (2017)」GALLUP社　より作成

実はあまり変わらない東京と地方で働く意識

CARRER FORが行った「東京と地方都市それぞれで働く人へのアンケート調査」※1によると、「働きやすさ」と「働きがい」を比較した結果、東京と地方では明確な差が表れませんでした。（図2）

この結果は、良い仕事が多く、平均年収も高い「働きがいを感じる東京」。そして、自宅と職場が近くワークライフバランスもとりやすい「働きやすさを感じる地方」という予想に反した意外な結果となりました。

こうした、実際に働く人の意識調査からも、地方で働くデメリットが少なくなっていることがうかがえます。

大企業で働くことは、大きな組織の中で成長できることに期待しがちです。しかし、小さい組織である地方の企業の方が、若いうちからさまざまな仕事や立場を経験でき、早く成長を実感することができると考えています。

また、大企業ではたくさんいる同僚やグローバルなビジネスを通して出会う人たちによって、多くの経験や人脈を獲得することができます。しかし、オンラインでできることが増えた時代。自分の努力次第では、地方でも同様のことが可能だと思っています。

そう考えると地元就職のデメリットは、それほどないのではないでしょうか。

「地方は東京より人が少ないが、声を掛けてくれる人はたくさんいる。地方の方が幸せを感じることができる」。これは、愛媛県で地域おこし協力隊に参加した学生の言葉です。

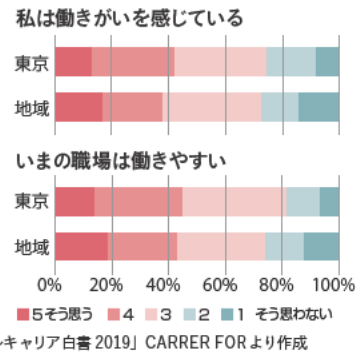
地方で働くメリットは、豊かな人間関係の中で生きる喜びを強く感じられること。最近は、高い収入を得ることだけが幸せな生き方ではないと考えている若者が多いと感じています。

働きやすさや働きがいにあまり差が無いわけですから、「東京か、地方か」と二者択一で悩む必要はないと思っています。地方と東京を行き来する「2拠点生活」を送る人も、これからもっと増えていくはずです。

※1東京と地方都市それぞれで働く人へのアンケート調査

CARRER FOR（事務局：一般社団法人 地域・人材共創機構）が「ローカルキャリア白書2019」の中で報告したアンケート調査。東京都と地方都市(岩手県釜石市、長野県塩尻市、岐阜県の一部、石川県七尾市、島根県雲南市）の18歳以上のビジネスパーソンなどが対象。P20に調査内容の一部を記載

図2　東京と地域の働きがい・働きやすさの比較



「ローカルキャリア白書2019」CARRER FORより作成

働きがいと働きやすさについて、「そう思う（5）」「ややそう思う（4）」の合計を比較すると、東京と地域で大きな差はなかった。

将来の目標を思い描き成長できる企業を見極める

これからは、転職や起業が当たり前の時代。ということは、自分の価値やスキルを上げることができる会社選びが重要になります。そのために、就職を希望する企業で自身が成長できるかどうかを見極める必要があります。

その目を鍛えるために、まずは将来何をしたいのか、自分のビジョンを描いてみることが大切です。40歳、50歳になった時、どんなことをしているのか。

もちろん、複数あっても構いません。「起業して社長になる」「牧場主になる」「ゲストハウスを経営する」など、さまざまな夢や目標を思い描いてください。

長期的なビジョンを描いたら、実現のためにこの1年で何を努力するのかについて考えることが重要です。将来起業したい人は、学生のうちからビジネスプランコンテストに応募したり、卒業後にスタートアップ企業※2に就職したりと具体的に考えてみましょう。

取り組んだ結果、1年で目標が変わってしまっても問題ありません。努力したことは、成果として残り、次に生かすことができます。まずは、行動に移すことです。

当然若いうちは迷い、なかなか好きなものが見つからないことも確かです。しかし、若いうちから将来の目標を確立することができれば、給料や知名度だけで就職先を選ばなくなると思います。

そして、就職してしまうと、どうしても目の前の仕事に追われてしまいますが、時々将来の目標について見つめ直してください。

※2 スタートアップ企業
まだ世に出ていない、新たなビジネスモデルを開発する企業のこと。一般的に、創業から2～3年程度の企業を指すことが多い

多くの社会人の声から刺激を受けてみよう

就職活動を前に、学生のみなさんには、多くの社会人の話を聞くことや、会ってみることをお勧めします。就職先に悩む学生の多くは、親の職業あるいは「学校の先生」という職業しか知りません。考える職業の選択肢が少なくては、良い就職先にたどり着くことは難しいからです。

NPOで働いている人や役場で働いている人、起業している人、経営者など多種多様な人に触れることで、刺激を受けながら職業観を育ててください。

実社会が抱える課題やニーズを解決するために働く人の声は、仕事のイメージをつかむ最高の教材。学校でも社会人の話を聞く機会があるはずですから、積極的に参加して多くのことを吸収してほしいです。

特に被災地では、復興支援のため多くの人が移住し活躍しています。東京で働いていたときは、地方では想像できないほどの高給で働いていた人たちもいるはずです。

こうした人たちがその地域を選んで、みなさんに多くのことを伝えに来てくれているわけですから、チャンスを逃さないでください。そして、輝かしい未来を思い描いてみてください。

多くの社会人の声に耳を傾けて選択肢と夢を増やしましょう！

横田（よこた） 浩一（こういち）
慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 特任教授

早稲田大学卒業後、日本経済新聞社に入社。2011年同社を退職後、株式会社横田アソシエイツを設立。2015年～慶應義塾大学大学院特任教授。企業のブランディング、マーケティング、CSV、HRM、イノベーション分野に携わると共に、地方創生に係る。共著に『SDGsの本質』『愛される会社のつくり方』『ソーシャル・インパクト』など多数。釜石市の地方創生にも携わる。

ジモトではたらく

故郷で見つかった「自分らしく」働ける会社

くまがい みゆ
熊谷 未悠 さん
株式会社気仙沼商会
総務・採用担当
2018年入社　気仙沼市出身 25歳

エネルギー供給を支える気仙沼の老舗企業

株式会社気仙沼商会は、創業以来100年にわたり、自動車や産業、住宅などに石油エネルギーを供給している企業。近年は太陽光や木質バイオマスなど再生可能エネルギー分野への取組も始め、地域の発展を支えるエネルギーの安定供給に貢献している企業だ。

「子どもの頃は、『地元のガソリンスタンド』というイメージでしたが、実はさまざまな事業を展開している会社だったことを知り、正直驚きました」

そう話すのは、気仙沼市出身で同社の管理部総務人事課で働く熊谷未悠さん。備品の管理や社員の社会保険、雇用保険の手続きなど事務作業が現在の主な仕事である。「総務の仕事は、会社全体や社員すべてに関わる仕事なので、小さなミスでもたくさんの人に迷惑をかけてしまいます。それだけに細かいところにも気を配らなければいけません」

熊谷さんはどちらかと言えば、仕事は早いものの、時折仕事が粗くなってしまうことがあるタイプだそうで、頼まれた仕事に対して聞き逃しや見落としが無いように、注意深く取り組むように心掛けているという。

幅広い業務を通して多くの人と関わることが魅力

事務職と言えば、「一日中パソコンに向かう仕事というイメージを持っていた」が、実際に仕事をしてみると、さまざまな業界のお客様をはじめ、会長から新入社員までの全社員と関わりを持たなければいけない仕事だった。今では「業務内容の範囲が広く、いろいろな経験ができることに魅力を感じている」という。

同社が経営するガソリンスタンド。

中でもやりがいを感じているのが採用の仕事。合同企業説明会への参加や、採用面接などで本社へ訪問して来る高校生や大学生などのアテンド、大学生向けのインターンシップも担当している。

「実は人と話をするのが苦手」と話す熊谷さん。最初は説明会の会場で話すことに戸惑いも多かったそうだが、経験を重ねるうちに楽しく思えるようになってきたという。

「私の話に対する学生たちの反応が人それぞれに違って面白いです。関心を持ってくれる話は人によって違うことが分かったので、説明会ではできるだけ多くの情報を伝えることを意識しています」

インターンシップ担当に奮闘「地元に若者を増やしたい」

同社は2019年に、初めて大学生のインターンシップを受け入れた。気仙沼市が人材業界大手企業と協働で実施した地元企業の新卒採用を支援するプロジェクトへの参加がきっかけだった。

打合せで上司のアドバイスに耳を傾ける。

当時担当としてプロジェクトに参加し「大学生の時にインターンシップを経験しなかった私にとって、初めての経験の連続で大変でした」

そのプロジェクトでワンデーインターンシップの企画を考えた時は、「1日だけでどんなことを伝えられるだろうか」「会社や気仙沼の魅力を伝えるだけでいいのか」などについて悩み続けたという。

努力の甲斐もあり、インターンシップに参加した大学生の何名かが、今年の採用に応募。内定につながった学生もいた。

熊谷さんは、「内定という結果につながったのは本当にうれしかったです。若者を一人でも増やすことで地元に力になれたのかなと思っています」と自分の仕事への手応えを実感していた。

上司に聞く

いつも明るいムードメーカー若手のリーダーとして成長に期待

管理部次長　菅野　修さん

管理部最年少の熊谷さんは、年齢が離れた社員と一緒に頑張っています。誰にでも好かれる性格で、いつも職場を明るくしてくれます。

担当している採用やインターンシップの仕事では、大学生と年齢も近いこともあり、同じ目線での気遣いある対応が光ります。

これから、後輩社員が増えてきます。若手のリーダーとして会社を引っ張る存在になってほしいと期待しています。また、自分の意見やアイデアを積極的に提案して経験を積み、さらに成長を遂げてほしいですね。

熊谷さんのある日の動き

- 8:30　朝礼
- 8:40　デスクワーク
  メールのチェックや各事業所から届く書類の整理をする
- 10:00　就活サイトのチェック
  専用サイトから就活生のエントリーや問い合わせが無いか確認
- 11:00　会社説明会
  オンラインで実施した説明会への対応
- 12:00　昼食
- 13:00　デスクワーク
  保険の手続きや会議資料の作成、電話の応対などを行う
- 17:00　終業

宮城県ではたらく魅力

順調に決まった就職先 突然襲った将来への不安

「周りの友達の多くは、高校を卒業したら気仙沼を出て、仙台や県外に住もうと思っていたようです。私自身も、当時は漠然と仙台の大学に進学して、そのまま仙台で就職するのか考えていましたね」という熊谷さん。

周囲に流されるように、友達と同じような考えを持っていたものの、自分の中では仙台でやりたいことや目標、将来の夢は決まらず、どこかしら判然としない思いを抱えていた。

高校卒業後は、希望通り仙台市内の大学に進学した。大学の講義を通じメディアに興味を持ち、卒業を控えた就職活動では、メディア業界にターゲットを絞り、仙台市内にある広告代理店の内定をもらうことができた。

しかし、スムーズに就職先が内定したものの、やりたいことを明確にせず、目標、将来の夢を具体的に描かないまで、果たして充実した人生を送ることができるのだろうかと、突如不安に襲われたという。

「もう一度、落ち着いてしっかり将来について考えてみよう」と思った熊谷さん、その時脳裏をよぎったのが、故郷気仙沼だった。

地元企業の説明会に参加 私らしい未来が描けた喜び

「仙台よりも生まれ育った気仙沼の方がやりたいことが見つかるかもしれない」と考えた熊谷さんは、インターネットで求人を検索し、名前を知っていた気仙沼商会の募集を見つけた。

参加した説明会では、自身に合った仕事について採用担当者と話し合うことができた熊谷さん。それまでの仙台での就活では、「当社はこういう人材が欲しい」「こういう人材を求めている」という一方的な説明ばかりだった。熊谷さんとしては、このような企業に入社したとしても、ただ企業の考え方に自分自身を当てはめられてしまうのではないかと思っていたという。

しかし、気仙沼商会は違っていた。「自分が会社に合わせるのではなく、自分に適した仕事に配属してくれる、ここは、そんな素敵な会社なのだろうと思いました」

こうして卒業後は、地元気仙沼に戻り同社に入社した熊谷さん。今では生まれ育った地で、仕事を通じて地域貢献したいという目標もできた。

心強かった「他社の同期」 心安らぐ「地元の人の声」

気仙沼商会に就職した当時、高校時代の友人はほとんど地元に残っていなかったという。また、社内には同期入社の社員もいるものの、職場が離れていたため顔を合わせる機会も少なく、なかなか地元就職の良さは実感できなかったそうだ。

しかし、社会人1年目に支えとなったのは、新卒採用支援プロジェクトで出会った、他の企業で働く社員たちだった。

「一緒に研修を受けているうちに仲良くなり、悩みや不安があったときには、お互いにLINEで励まし合うことができました」

また、仕事の時には、職場の人たちやお客様が家族のように打ち解けた態度で声をかけ接してくれる。そこが地元で働く良さだと実感した熊谷さん。

「地元のみなさんの声と気持ちがとても心地良くて。安心できる自分の居場所が見つかり、就職活動中に悩んで本当に良かったなと思っています」と晴れやかな表情を浮かべた。

他の事業所へ書類を届けるため外出する。

お客様からの電話に応対する。

復興が進む地元の未来をこれからも見届けていく。

熊谷さんのオフショット

休日は、車やバスを使って仙台へ。大学時代の友達と一緒に遊んだり、女子会を開いたりして、お互いの近況について話し合い盛り上がっているという。

「ここ数年で三陸道がほぼつながり、仙台までの移動が近く感じるようになりました」と熊谷さん。たまに触れる都会の空気と気心の知れた友人と過ごす時間は、良い気分転換となり、地元で頑張る活力につながっているようだ。

後輩へのアドバイス

気仙沼は、人と人とのつながりが深いところが魅力だと思っています。誰もが知り合いみたいなところはあるのではないでしょうか。

高校生の時は、そんな狭い社会がなんとなく嫌でした。でも、地元に戻って就職した今は、気仙沼のみなさんが味方になってくれると安心感を持つことができます。両親だけではなく、近所の人やお客様、職場の上司も家族のように接してくれます。

みなさんが就職を考えるときも、もう一度地元を客観的に見てみてください。これまで気が付かなかった良さが見つかるかもしれません。

企業情報

株式会社気仙沼商会

所　在　地／宮城県気仙沼市南町 1-2-6
T　E　L／0226-23-1600
H　　P／http://www.k-shokai.co.jp/
代表取締役社長／高橋 正樹
創　　業／1920 年
資　本　金／4500 万円
従 業 員 数／230 人（2020 年 12 月現在）
事 業 内 容／石油製品の販売、住宅設備機器の販売及び設備工事、損害保険・生命保険代理業　等

大好きな港町・気仙沼で復興への「航海」を見届ける

後藤（ごとう） 陽菜（ひな） さん
株式会社オノデラコーポレーション
アンカーコーヒー・マザーポート店
副店長
2016年入社　愛知県出身 27歳

過ごしやすい店と職場をつくるカフェの副店長

気仙沼市内を流れる大川沿いに建つ、アンカーコーヒー・マザーポート店。開店以来、地元の人たちに愛され続けるカフェで、後藤陽菜さんは「ボースン」（船舶で甲板長を意味）と呼ばれる副店長を務め、「クルー」と呼ばれるスタッフの舵取り役を担っている。

「接客業は、お客様に居心地の良い空間が提供できるかを第一に考えることが大切」だという後藤さん。自分自身を「目の前で起きたことに捉われがち」との分析を踏まえ、仕事においては常に店全体を見渡すことを意識して行動するように心掛けている。

「お客様の水が無くなっていないか」、「コーヒーを持っていくタイミングはまだか」、「幼い子どもが店内をうろうろしていないか」。こうした点に誰よりも早く気付くことは、クルーの負担を減らすことにもつながると後藤さんはいう。「接客に関してはホスピタリティを心がけていますが、ボースンとして、常にクルーが働きやすい職場づくりを意識することも大切と考えています」と仕事に対して意欲を燃やしている。

後藤さんの ある日の動き

※「朝番」勤務の場合

- 8:00 **出社**　清掃やコーヒーマシンの調整など開店準備をする
- 9:00 **開店**　入り口でお客様を迎え、接客する
- 13:00 **昼食**　お店の混み具合を見ながらクルーと交代で休憩する
- 14:00 **再開**　店に戻り接客を再開する
- 15:00 **デスクワーク**　タイミングを見計らって事務所のパソコンでPOPの制作などをする
- 16:00 **引継ぎ**　遅番の責任者に注意事項などの情報を共有する
- 17:00 **終業**

厳選の豆と自家焙煎が強み 家族で安らぐ空間を提供

アンカーコーヒーを経営する株式会社オノデラコーポレーションは、気仙沼市で水産物の輸出業を手掛ける企業である。2005年にコーヒー事業部を立ち上げると、輸出入のノウハウを生かし、世界中の産地から厳選して仕入れたコーヒー豆を、マザーポート店に併設された工房で焙煎し店舗で提供している。

アンカーコーヒーは、現在は宮城県内に7店舗、岩手県内に1店舗を展開。港町・気仙沼のイメージから、「船」を連想する言葉が、店舗やスタッフの呼び名、コーヒーのブレンドなどに使われている。

「どのお店も地元の人に愛され、応援していただいています」と後藤さんは誇らしげに話す。都会のカフェの主要顧客が若者であるのに対し、アンカーコーヒーは、子どもからお年寄り、カップルからファミリーと幅広い年代、客層が利用している。

お客様にコーヒーと笑顔を届ける。

「家族で楽しい時間を過ごしていただけるような空間を提供するのが、私の仕事のやりがいです」接客を通して、自分自身もお客様から応援してもらい元気をもらっているという。

心を込めた接客で 気仙沼のファンを増やしたい

「キャプテン（店長）が店の売上や経営のことに集中できるよう、ボースンである自分が現場を指揮してサポートしたい」という後藤さん。自身が理想とする接客や、思い描く店の雰囲気づくりには未だ届いていないようで、「まだまだ手探り」の状態は続く。

例えば自信作と思っているPOP（店内広告）が完成しても、なかなかお客様に響かなかったり、何気に店内に置いた小物が、意外にお客様に喜ばれたりと、まだまだ分からないことも多く、悩みは尽きない。それでも自ら考えながら結果を出すこの仕事が楽しいという。

「これからも、気仙沼の人に愛されるような店であり続けるため、接客や店づくりにさらに磨きをかけていきます」。さらには、観光や出張で訪れる人たちにも、お店や気仙沼のファンになってほしいと願っている。その理由を後藤さんに聞くと、「それは、私自身が気仙沼のことを大好きだからです」と笑顔で答えてくれた。

世界各地から
厳選したコーヒー豆。

上司に聞く

専務取締役
小野寺 靖忠さん

現場をまとめる力を評価 印刷物の制作でも力を発揮

明るく大らかな性格の後藤さんは、キャプテンを支えクルーをまとめながら店を上手に回してくれています。店で使うメニュー表やPOPなどの制作では、持ち前のセンスを発揮していただきとても助かっています。

引き続きリーダーとして、多くの仲間と一緒に仕事をしていくことになりますが、後藤さんは、クルーの個性や能力を伸ばしてより良い方向に導けるような人になってくれると期待しています。

また、県外から移住しているクルーもいるので、先輩として良き相談相手になってほしいですね。

宮城県ではたらく魅力

名古屋での就活で見えた5年後の自分の姿に悩む

愛知県出身の後藤さんは、大学を卒業後、気仙沼へターン移住した。地元は名古屋市から40キロほど南にある半田市で、名古屋市内にある高校と大学に通ったという。

「当時は私の周りの誰もが、生活に便利で住みやすい名古屋市に憧れていて、私も同じ考えでした」

名古屋市内の大学に進学し卒業後は地元の企業の一般職として就職。住む場所は、もちろん名古屋市内、そんな将来を思い描いていたという。

大学4年生になると、本格的に就職活動を開始。名古屋市内で開催された合同企業説明会では、どの企業のブースでも、入社後の社員像について詳しく説明していたという。「いろいろな企業の話を聞いたのですが、どの企業も、5年後の自分の姿がなんとなく見えてしまったように感じられて、それではつまらないと思ったんですよね」

その後、無事ある企業に内定することができたのだが、このまま就職先を決めてしまっていいのだろうかと、年明けまで悩み続けた。周りの友人はすでに進路を決め、残りの学生生活を楽しんでいる中で、焦っていた後藤さん。やはり「つまらない」という心のモヤモヤは晴れることはなかった。

衝撃を受けた気仙沼の現状 知りたくなった5年後の姿

年が明けた1月、後藤さんは気持ちを切り替えようと東北地方へ一人旅をすることにした。深夜バスを乗り継ぎ赴いた地は気仙沼。

「父が福島県出身ということもあり、東北旅行のガイドブックを眺めていたのですが、ふと、ふかひれの写真が目に飛び込んできて。食べたいと思ったんです」

東日本大震災の時に、名古屋で目にした被災地のニュースや映像に衝撃を受け、「怖い」というイメージから、これまでずっと被災地を避けてきた。半ば勢いで訪れた気仙沼は、震災から5年以経っても復興が進んでいなかった。その様子を目の当たりにし、驚くとともに今後どう変わっていくのかを知りたいと思うようになった。

「それなら、ここに住んで働いてみよう」と後藤さんはインターネットで気仙沼の求人を検索。その中で見つけた同社に応募し、2016年4月に入社した。気仙沼の復興を見届けるという目標が見つかり、就活で抱いた心のもやもやもようやく晴れた。

自身の成長とまちの復興がモチベーションを生む

遠く離れた土地で初めての一人暮らし。当時は慣れない仕事から、「疲れて帰っても一人でいるのは寂しかった」と後藤さんは振り返る。そのため、入社間もない頃は、毎晩母親に電話をしていたそうで、その時に母親から掛けられた「やれるところまでやってみなさい。辛かったらいつでも帰ってきていいから」という優しい言葉に励まされ、仕事を続けることができたという。

日々の仕事を重ねるうちに、不安と寂しさを克服した後藤さん。新規店舗のキャプテンに抜擢されるまでに成長した。しかし、店は問題なく回っているか、クルーは指示通りに動いてくれているか。気が付けば、あらゆることを一人で抱え込み疲れ果ててしまったという。

注文を受けたコーヒーをドリップする。

「もっとクルーを信頼して任せてみよう」その思いが後藤さんを変えた。2020年1月からは、マザーポート店のボースンに就任。間もなく気仙沼に来てから5年が経とうとしている。「港周辺の道路や店舗が整備され、初めて来た時よりもにぎやかになったと実感しています」。これからも大好きな土地と人に囲まれ、気仙沼の復興を見届けたいと思っているという。

ラテアートでお客様の心を和ませる。

厳選した豆は自家焙煎される。

後藤さんのオフショット

休日は、ドライブに出かけるという後藤さんは、「市外や県外で違う世界に触れ、リフレッシュしています」と話す。

また、今年から釣りを始め、職場の同僚と釣りに出かけることもあるという。

「ビギナーズラックで生まれて初めて魚を釣ることができてテンションが上がりました。これからも機会があれば続けたいですね」

後輩へのアドバイス

「一生、名古屋で暮らす」と何となく思いながら就職活動に臨んだ私でしたが、ギリギリまで悩んだことで、気仙沼での就職につなげることができました。みなさんも進路を考える時は、就職活動を始める前に良い目標を見つけられるといいですね。そのためには、さまざまなところに出かけたりチャレンジしたりすることが重要だと思っています。

気仙沼は楽しい町。そして、人が暖かい。復興する姿を見てみたいというファンの一人として、気仙沼での就職を考えてくれたらうれしいです。

企業情報

株式会社オノデラコーポレーション

所在地	宮城県気仙沼市舘山 1-6-31
TEL	0226-23-8091
HP	https://www.onoderacorporation.com/
代表取締役	小野寺 忠夫
創業	1997年
資本金	600万円
従業員数	49人（2020年12月現在）
事業内容	冷凍水産物の輸出入及び漁業用餌料や漁具の販売、コーヒーショップ、カフェの経営及び自家焙煎珈琲豆や関連商品の販売 等

ジモトではたらく

アメリカの食文化を発信 人が行き交うお店を目指す

故郷・松島町で開店したハンバーガーショップ

松島町内にあるハンバーガーショップ「ハリーズジャンクション」は、アメリカの西海岸にあるカフェのような雰囲気の店である。

オーナーシェフを務める佐藤賢将さんは、「本場の味が楽しめるハンバーガー専門店は、宮城県はもちろん東北でも珍しいと思いますよ」とアピール。店のハンバーガーに使用されるパテはビーフ100%で、使用する部位や挽き方にこだわり、ジューシーな味わいと肉そのものの食感がダイレクトに伝わり評判の逸品だ。

15種類のハンバーガーのほかにも、タコスやサンドイッチを提供。素材にもこだわり、トマトは地元松島産、マヨネーズとベーコンは自家製を使用。地元の特産品であるカキやずんだを取り入れたハンバーガーも提供している。

佐藤さんの1日 あるある日の動き

- 9:00 出勤 子どもを保育園に送ってから店に向かう
- 9:10 開店準備 店内の清掃やインスタのチェックなどをする
- 11:00 開店 調理や接客などの合間に材料の仕込みも行う
- 14:00 昼食 合間を見て昼食をとる
- 20:00 閉店 その日の売り上げの集計や事務作業、インスタの更新などをする
- 22:00 帰宅

自分で店を持つことは、「誰かに指示されることなく自分の判断で自由に仕事ができる点が魅力」だという。その反面、店舗運営が上手くいかないときに、一人で苦労する大変さもある。しかし、「それもやりがいの一つで、それを乗り越え、結果が出たときはさらにうれしいですね」と佐藤さんは話す。

ご縁を大切におもてなし リピーターにつながる

松島町出身の佐藤さん。高校卒業後に上京し、30代になってUターンを決意。地元で自分自身の店舗を開き、奥様と二人で切り盛りしている。

店名は、長男の名前をアメリカ風にアレンジした「ハリー」と、人が交流する願いを込めて接続を意味する「ジャンクション」を合わせてつけたもの。週末には、キッチンカーを出して、町外の住宅展示場やイベント会場でハンバーガーを提供することもあるという。

接客で特に意識しているのが、お客様への声掛け。「縁が合ってご来店いただいたのですから、できるだけ多くのお客様と仲良くなりたいと思っています。ですから、可能な限りお話をして、お帰りの際は出口までお見送りします。誰でもいつでも気軽に立ち寄れる場所を目指しているんです」と佐藤さん。

ボリューム感抜群のハンバーガー。

キッチンカー出展の依頼も、取引先やお客様とのつながりから生まれた仕事。「人との縁を大切にすることが大切だと感じている」と話す。

SNSでファンを獲得 アメリカ文化を定着させたい

料理や店舗の様子、イベントなどの情報は、インスタグラムで発信。それを通じて店を知り、わざわざ仙台市内から通う常連客も多い。

「インスタを見た地元の人が、おばあちゃんを連れてくることがあるんです」。アメリカではお年寄りも当たり前にハンバーガーを食べている。そんなアメリカの食文化を、松島町が受け入れてくれたのがとてもうれしいという。

オープンから3年目を迎え、ハリーズジャンクションは今では地元にすっかり定着した。これまで週末限定だったキッチンカーも、専属のスタッフを雇用する予定で、「毎日県内のどこかで営業したい」と夢は膨らむ。

当面は店の経営を軌道に乗せ、その後は地元の子どもたちに、アメリカの遊びや食を教えてあげたいと思っている佐藤さん。「日本を代表する観光地の松島。そこに、アメリカの食文化が根付いたら、面白いと思いませんか?」と笑顔で話してくれた。

アメリカ西海岸のカフェを意識したお洒落で開放的な店内。

スタッフに聞く

気遣いが光るオーナーシェフ 夫の故郷松島で自然に親しむ

妻でスタッフでもある佐藤 理恵子さん

一緒に仕事をしていて感じるのは、お客様に対する気遣いや声掛けが素晴らしいということ。家族や友人に対してもよく気が利くなと、いつも感心しています。

私は、東京で生まれ育ったこともあり、主人から突然「松島町でお店を出す」と聞いた時は驚きました。

車が無いと移動ができない、お店が少ないなど、不便なところもありますが、松島町は空気がきれいで自然を身近に感じることができるので、ストレスなく暮らせるところがいいですね。

宮城県ではたらく魅力

野球漬けだった少年時代 上京後に飲食店開業を志す

松島町で生まれた佐藤さん。子どもの頃はプロ野球選手を目指し、野球漬けの日々だったという。中学卒業後は、甲子園で準優勝の経験もある仙台市内の私立高校へ進学。硬式野球部に入部し、野球に打ち込んだが、プロ野球選手への道は厳しく、断念せざるを得なかった。

せめてスポーツに関わる仕事がしたいと考え、アスリート向けの整骨院で働くことを当時の野球部専属のトレーナーに相談したが、トレーナーから整骨院での仕事も門戸が狭く、厳しいというアドバイスを受けこれも断念。結局、一般企業へ就職した。

就職先は、全国区の自動販売機の管理運営を行う会社。そんな佐藤さんに起業への思いが芽生えたのは、東京で営業担当として働きはじめて3年が経った時。「子どもの頃、祖母が食事の支度をする姿を横で見て、料理に興味を持ちました。自分で食事を作ったりもしていました。だから、自分が起業するなら飲食店だと思っていました」

店主の考え方に共感 バーガーショップ開店を志す

一般企業を退社後、スイーツ店をはじめ、いくつかの飲食店で働きながら経験を積み、起業資金の確保とタイミング、どんな飲食店を出すのかを考え、いつの日か自分自身の店舗を持つ夢を描きながら働いた。

転機は、中目黒の本場アメリカのハンバーガーを提供する店で働いた時。アメリカ西海岸に住んだ経験を持つ、オーナーシェフの店づくりへのこだわりに共感し、自然と「いつか自分もアメリカ西海岸をコンセプトにしたバーガーショップを出したい」と思うようになったという。

起業の方向性が見え始めてきたころに、年末年始の帰省で地元松島に戻った佐藤さんは、中学校時代の野球部の恩師から「松島町から子どもが減り、お店も次々閉店している。町がどんどん寂しくなっていく」という話を聞く。その言葉に「自分自身が松島町でできることはないのか」そんな思いを抱き始めるようになった。

恩師の一言で地元開業を決意 地域の盛り上げにも協力

恩師の言葉通り、小学生の頃は活気にあふれていた商店街が、すでに当時の面影は薄く、通い詰めた記憶が残る駄菓子屋や文具店も、シャッターで閉ざされていた。

地元が元気を取り戻すために自分にできることは何かを考えた佐藤さん、起業の地を松島町に決め、2018年にハリーズジャンクションをオープンした。

自宅は店からも実家からも近く、子どもにとって、祖父母がそばにいることは良いことだと感じている。「近所の人も気軽に声を掛けてくれるので、家族以外の大人と触れ合う貴重な経験をしていると思います」と佐藤さんは目を細める。

妻の理恵子さんと協力して店を経営する。

現在は、商工会青年部に所属し、地元の仲間とイベントを盛り上げたり、地域の未来について語りあったりと、充実した毎日を送っている佐藤さん。

「仙台市内に店を出せば良かったのではという声もたまにいただきますが、仙台に出すならむしろ、東京で起業すると思います。地元の松島町で起業することが重要ですし、この地に店を出せて本当に良かったです」と笑顔で話してくれた。

佐藤さんのオフショット

長男と過ごす貴重な時間が気分転換になっているという佐藤さん。「土日もお店があるので、子どもが小学校に入学してしまうと、より一緒にいる時間が無くなってしまうので、今を思い切り楽しんでいます」

店名が子どもの名前に由来していることについて「まだ、よく分かっていないみたいです」と笑う。それでも、「いつか、アメリカの文化に関心を持ってくれたらうれしいですね」と話してくれた。

ハンバーガーを軽快に完成させていく。

店の名前もキャラクターも長男に由来する。

企業情報

Harry's Junction（ハリーズジャンクション）

所　在　地／宮城県宮城郡松島町高城字町 195-1 コセキビル 1F
T　E　L／022-290-6827
H　　P／https://harrysjunction.com/
代　　表／佐藤 賢将
開　　業／2018年
従 業 員 数／2人（2021年1月現在）
事 業 内 容／ハンバーガーショップの経営

後輩へのアドバイス

海沿いに面した松島町は、夏は涼しく、冬もあまり雪が積もりません。大都市である仙台に近く、自然も豊かです。地元に住む魅力は、やはり居心地が良いことです。

だた、一度外から見てみないと、その魅力に気が付かないこともあるので、様々な経験をしてみましょう。そして、その間も地元のことは忘れないでほしいと思っています。

起業したりお店を出したりするときも、地元なら助けてくれる人も多いのではないでしょうか。

都会と地方の違い

―働きがいの意識調査から―

慶應義塾大学大学院　政策・メディア研究科
特任教授　**横田 浩一**さん

東京と地方都市それぞれで働く人へのアンケート調査

働きやすさと働きがい 仕事満足度は変わらない

働きやすさ、働きがい、仕事への満足度について、「そう思う（5）」と「ややそう思う（4）」を足した値は、東京と地方（地域）でほぼ変わりませんでした。（図1、2、3）

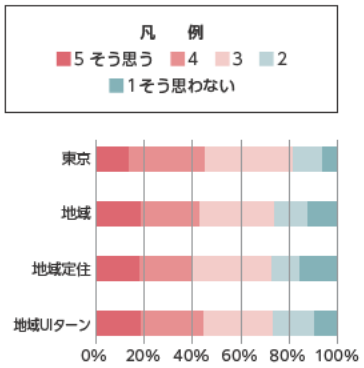


図１：いまの職場は働きやすい

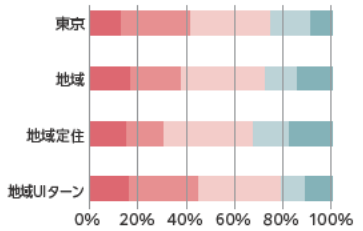


図２：私は働きがいを感じている

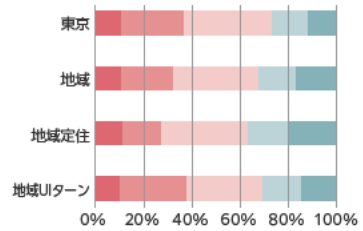
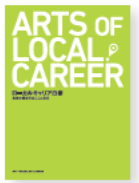


図３：いまの仕事に満足している

調査概要

CARRER FOR（事務局：一般社団法人 地域・人材共創機構）が「ローカルキャリア白書2019」の中で報告したアンケート調査。東京都と地方都市（岩手県釜石市、長野県塩尻市、岐阜県の一部、石川県七尾市、島根県雲南市）の18歳以上のビジネスパーソンから577サンプルを回収。

また、UIターン移住者のサンプルをより多く集めるため、125サンプルを回収した。



このことから、「東京か」「地方か」という場所だけで仕事を選択しなくても良い環境が整いつつあることが、調査結果からもうかがえます。

ここに住みたいという意思が働きがいに影響する

地方にUIターンした人は、東京や地方にずっといる人（地域定住）と比べて働きがいや仕事満足度が高いという結果になりました。（図2、3）

さらに、職場の選択を「やりたいこと」で決めてきた人や、仕事を通して成長や地域貢献を感じている人が多い結果となりました。（図4、5、6）

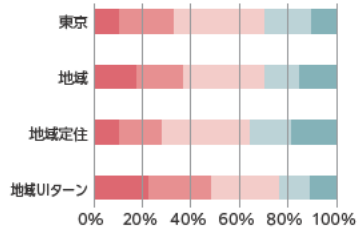


図４：私の職場の選択を「やりたいこと」で決めてきた

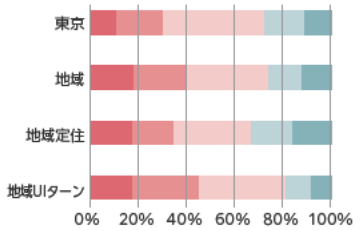


図５：私の仕事は地域（社会）に貢献している

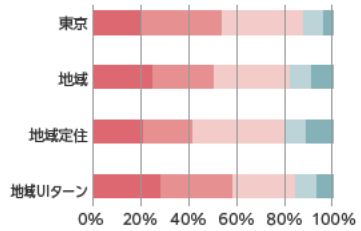


図６：仕事を通じて人間として成長できる

地方にUIターンした人は「地元に戻りたい」「この地域に住みたい」と移住や仕事を決め、高いモチベーションを維持しながら仕事に取り組んでいます。こうした強い意志と充実感が働きがいや仕事満足度に表れています。

地方の仕事は自分の影響力を実感できる

「私の仕事は周りに大きな影響を与える」と感じている人は、地方の方が高くなりました。（図7）

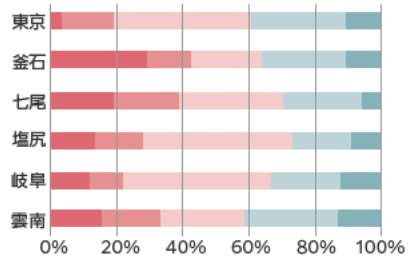


図７：私の仕事は周りに影響を与えている

地元で働くことを考えよう

若い時は、物や情報にあふれ便利な都会生活にあこがれを抱くのは仕方のないこと。就職活動をする学生も、地元を出て就職したいと、首都圏の企業に関心を持ってしまいがちです。

一方、地方にも魅力的な企業や、地元に貢献できる働きがいのある仕事がたくさんあります。また、地元では、自然豊かな住み慣れた場所で、家族や友達と共に安心して暮らすことができるはずです。

この冊子に登場したみなさんは、地元や移住先に魅力を感じながら充実した毎日を送っています。みなさんの地域でも、地元の魅力を知っている社会人がきっといるはず。

こうした人たちから直接話を聞いて、これまで気づかなかった「ジモトではたらく」魅力について考えてみましょう。

仕事の規模や動くお金の額は、東京の方が大きいことが想像できますが、周囲への影響については、地方の方が実感できるという結果となりました。

地方では、地域のさまざまな人と関わりながら、プロジェクトを成し遂げることが多く、その時に「ありがとう」と感謝されたり、自分の成果が目に見えやすかったりすることが、影響の実感につながったと考えられます。

一方、東京の場合は、大きな組織の中でビジネスが動くため、個人の影響を実感しづらいのかもしれません。

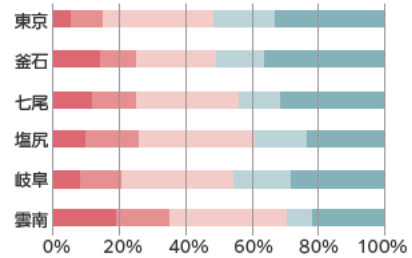


図８：定期的にあって話す地域コミュニティがある

人のつながりを強く感じる地方での働き方

地方では、身近な地域コミュニティを持っているという回答が東京より高くなりました。（図8）

市民や行政、NPOなど、多種多様な人が関わっている地方では、人と人とのつながりが強く、東京の場合は、ビジネスライクの付き合いもあり、どちらかといえば関係が薄いと考えられ、人のつながりという観点からは、地方と東京で違いが見られました。

被災地で強く感じる人への感謝と働きがい

「人生において感謝することがたくさんある」という項目について、釜石市では半数以上の人が「そう思う」と回答しています。（図9）

これは、震災復興に向けたつながりや、共助の経験が反映されたと考えられます。

また、釜石では、これまで復興支援に多くのボランティアが集まり、そのまま定住した人が多くいます。「復興のため」という明確な目的をもって移住し、地域の人と共に働いている被災地は、どの地域よりも働きがいを実感できる場所ではないでしょうか。

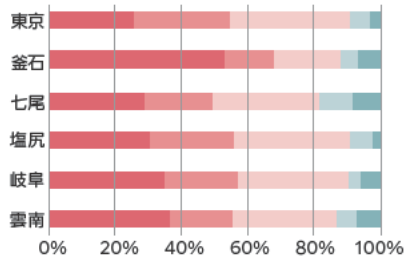


図９：私は人生において感謝することが多い

問い合わせ先

復興庁雇用促進班
TEL. 03-6328-0274